

# 沖縄県における風位語彙の分布

——『風の事典』を資料として——

志 村 文 隆

はじめに

1. 問題の所在と本稿の目的
2. 『風の事典』掲載の語彙
  - 2.1. 『風の事典』掲載語の性格
  - 2.2. 『事典』掲載の沖縄地方の風位語彙
3. 掲載語から見た風位語彙の分布と特徴
  - 3.1. 単一風位に見る風位語の分布
  - 3.2. 風位変化および不特定風位を表す風位語
4. 指示風位から見る風位語彙の部分体系
  - 4.1. 『事典』の記述と語彙体系
  - 4.2. 指示風位から見る風位語彙体系

おわりに

はじめに

関口武によって著された『風の事典』は、全国規模の調査に基づいた、豊富な風位語を収めた語彙集として知られているが、1985年に刊行されて以来、この語彙資料を用いた研究は進んでいない。本稿では、本書の資料を利用して、沖縄本島から宮古、八重山までの沖縄県における風位語の分布図を作成して提示し、その分布特徴を明らかにする。また、資料から読みとれる語彙構造に着目し、風位語彙の部分体系の地域差を考察する。

## 1. 問題の所在と本稿の目的

日本各地で用いられる風位語彙を収集、解説した文献には、全国規模のものに、古く柳田(1942)がある。また、方言語彙集として、五十音順に掲載された語をたどり、意味や使用地域を知ることが可能な文献には、関口(1985)ほか、尚学図書編(1989)などがある。柳田では、語項目ごとにまとめられる、分布特徴や語源説などの解説に特徴がある。尚学図書編は方言辞典であ

り、それぞれの語で示される意味記述と、原資料によって示される使用地域が確認できる。一方、関口は「事典」の名称を持つが、後半の語彙集は、大規模な全国調査の結果を詳細な使用地点のデータとともに掲載した風位語彙集となっている。前半部の解説では、特定の語について、都道府県別の使用特徴を把握できる部分もある。こうした長所がありながら、本書を利用した風位語彙研究は、ほとんど進展していないのが現状である<sup>1</sup>。

また、上記の各文献に配列された見出し語ごとの情報を通覧する形のままでは、風位語彙の分布特徴を把握することは容易ではない。さらに柳田の論考や関口の解説部分では、語をあくまで単独で扱うことから、語彙を体系的に扱う視点が見られない。

そこで、収載語の最も多い、関口の『風の事典』をデータとして、一定地域の風位語彙の特徴が、どの程度現れるのかを考察することにした。本稿では、風位語彙資料が比較的少ない沖縄地方を対象に、風位語彙の分布図を作成し、その特徴を明らかにするとともに、各地点の風位語彙がどのような構造を示しているかを考察する。

## 2. 『風の事典』収載の語彙

### 2.1. 『風の事典』収載語の性格

『風の事典』（以下、『事典』）は、気象学者であった著者の関口武が、日本の風名（風位語）を収集し、整理と解説を行った文献である。本書全体で2145語<sup>2</sup>とする風位語を収めており、わが国では最大の風位語彙集である。

本書は、「第一部」と「第二部」から構成される。「第一部」は、風位語彙集である「第二部」に収載された語彙を主な資料として、使用度の高い語や希少な語をとりあげ、解説を施した部分である。「序章」以下、「船乗りの言葉」「海と山の風」「季節の風」「地方的な風の名前」「文学的な風の名前」の章からなる。また、「第二部」の中心となっているアンケート調査の結果をもとに、「風名」と「風向」とを都道府県別の「使用度数」として一覧できる表が付されており、これは日本全国規模の風位語の分布状況を知るデータとして貴重なものである。著者は、このデータの提示のほかにも、『増補風位考資料』等から、各語の使用地域の特徴を明らかにしている。これらの記述を整理する形で、風位語が示す方位別に、分布地域、風の強弱、寒暖、吹く季節、吹く時間の長短などに注目し、日本の風名が「瀬戸内・西日本型」「日本海型」「東日本太平洋型」の三系統に分けられるとする。そして、風に対する日常的な関与の仕方の違いによって、風位語を、「航海業者主唱型の風名」「沿岸漁業者主唱型の風名」「地方的な風の名前」「全国的で、海と山との関連で吹く風」

<sup>1</sup> 近年の『風の事典』を利用した「風位伝承の分布」研究として、たとえば、中山（2009）の一部に試みがある。風位別に収載語を都道府県ごとにカウントし、その件数を地図に示している（22-62ページ）が、代表的な収載語ごとに地点別の延べ語数を示したもので、言語地図ではない。

<sup>2</sup> 関口（1985）の「第一部」に「日本には2145の風の名前がある」とし、「それが三グループに分けられている」とある（8ページ）。一方、全国の風位語を五十音順に収録した「第二部」では、2036語を並べたと凡例に記されている（145ページ）。

「文学的な風の名前」「湖の風の名前」のそれぞれのグループに分類し、この6分類に沿いながら、「第一部」の解説が進行している。

「第二部」は 風位語を見出し語として、五十音順に並べた風位語彙集である。収載された2036語とされる語彙の出所は、以下の3種となっている。

- ①1980年に全国2322か所の漁業協同組合の地区漁協に依頼したアンケート調査のうち、回答のあった1301か所のデータ
- ②著者による「実地調査による資料」
- ③1935年に刊行された、柳田国男編『風位考資料』

①は、漁業者を対象に実施された調査で、本書のデータの根幹をなす資料と言える。一方、②は、著者によると、「機会ある毎に行ってきた実地調査による資料」<sup>3</sup>とする。③は、柳田国男によって1935年に編まれたもので、のちに関口自身による「日本の風の地方名の研究」を合冊して、1942年に柳田国男編『増補風位考資料』として出版されることになる。

ただし、これらの3種の区分・出所のなかで、著者による実地調査とする②の具体的内容が必ずしも明確ではない。まず、③のデータについては、『風位考資料』収載語との突き合わせのほか、見出し語に付された○と△の記号の内容から判別できる。著者による「第二部」の凡例によれば、「昭和五十五年（一九八〇年）現在で集められた日本各地の風の地方名二〇三六語をアイウエオ順に並べ（略）」とある。さらに「地名の右肩上につけてある記号○と△は、その地点で約半世紀前に、その風名が使われていたことを示すものである」とあり、続けて「そして○印は現在はもはや使われていないことを、△印は現在なお使われていることを示すものである。無印は、今回の調査により、その風名の使用が報告された地点を示すものである」と記されている<sup>4</sup>。このことから、記号○および△が付された語が、③に該当して、①のデータと比較されたことがわかる。ところが、ここで言う「今回の調査」のなかで、②については、どの地点で、どのように実施され、また得られた語がどの見出し語に該当するのかは、明示されていない。

しかし、収載語の採集地点名を見ると、大字単位の地区名までを記した地点が比較的多く、全国規模の方言語彙の分布資料としては、細密なデータを備えた文献と言える。たとえば、沖縄地方を例にとると、「国頭郡伊江村川平」「島尻郡与那原町板良敷」となっている<sup>5</sup>。一方で、「南島地方」「八重山郡」「石垣島」のように、広域の表示となる例も見られる。

## 2.2. 『事典』収載の沖縄地方の風位語彙

これまで、南西諸島における風位語研究の事例が少ないことは、既に志村（2008）等でも指摘してきた。尚学図書編（1989）の収載語も、琉球方言資料の限られた文献数を反映して、島嶼ごとの記述は少なく、その意味でも『事典』に収載された南西諸島の風位語は、貴重な資料と言え

<sup>3</sup> 関口（1985）5ページ。

<sup>4</sup> 関口（1985）145ページ。

<sup>5</sup> 本稿で使用する『事典』「第二部」のデータ使用地点のうち、「サンヌバカジ」（490ページ）以降で「石垣市真栄田」とされる地名は、「イールカジ」項目で記された「石垣市真栄里」（227ページ）の誤植と思われる。

る。ただし、『事典』自体も、琉球方言の収載語は国内の他地域に比べて少なく、「第一部」では、南西諸島を対象とした風位語の解説はほとんどない<sup>6</sup>。

そこで、沖縄本島から宮古、八重山までの沖縄県の各地域（本稿では、これらの地域を総称して「沖縄地方」と呼ぶ）の用例を『事典』「第二部」から採集し、このデータから明らかになる沖縄地方の風位語彙の特徴を考察することにした。収載語は異なり語数で42であった<sup>7</sup>。

『事典』「第二部」収載の風位語彙には、項目となる見出し語とともに、意味が記述されている。そして、各語に付される意味記述のほとんどに風位が記されており、特に沖縄地方では、その多くで風位のみ記載にとどまっていることがわかる。しかし、すべての用例を見渡すと、風位語が示す意味記述部分からは、風位のほかにも、風の強弱、風が吹く時季、温度、天候、海の状態、操業の適否などを読み取ることができる。これらの風の特性のほか、漁業協同組合を調査対象としたことによる、海上での操業との関係等は、風位語が持つ複合的な意味を形成する重要な要素となる<sup>8</sup>。

本稿では、『事典』の意味記述のなかでは豊富な用例を示す、語が指し示す風位に特に着目し、用例から浮かび上がる特徴を考察することにした。

意味特徴となる風位を基準に、収載語を整理すると、①単一風位を指示する語、②複数の風位を指示し、相互の風位間に連続する風の変化がある語、③指示風位のない語、の3種に分類できる。①は、収載された沖縄地方の風位語の異なり語43語のうち、37語にのぼり、全体の9割近くを占めた。②は3語である。③は4語であり、特定の風位はないが、季節の意味を含んだ語としても分類が可能である。

### 3. 収載語から見た風位語彙の分布と特徴

#### 3.1. 単一風位に見る風位語の分布

事典に収載された沖縄地方の風位語のうち、意味記述部分に表された風位が単一方向となっている用例について、風位ごとに分布図を作成し、特徴を読み取る<sup>9</sup>。

##### 3.1.1. 北風

図1に示したように、沖縄地方全域にニシカジが広く分布している。ニシは、北を表す方位語と

<sup>6</sup> 「ハイ・ハエ」の項目中、使用地点を解説した箇所（74ページ）に「沖縄」が見えるが、「ハイ・ハエの県別使用事例数」等の集計表からも、沖縄の用例は欠落している（76-77ページ）。

<sup>7</sup> 音韻上の変異形と見られる語形は基本的に一語としてまとめた。たとえば、アガリカジ・アガルカジ・アガイカジ・アガイカゼは、すべて「アガリカジ」とした。ただし、語彙分布の考察上、言語地図上では統合せずに、残した範囲の語形がある。例として、以下の語形は「アガリカジ」に含めずに「アーリーカジ」とした。アーリーカジ・アーリーカジイ・アーリーカンジ・アーリーハジ・アーリカジ・アーリカズ・アーリハジ（ブチ）・アールカジ・アールカチ。

<sup>8</sup> 志村（2007a）31-36ページ。

<sup>9</sup> 『事典』収載の地名は、その後の市町村合併等で変更になっている場合もあるが、本稿では原則として『事典』記載の地点名のまま使用する。また、同一地点で報告された複数の語形については、記号の上へ一を付した。

して、奄美・沖縄・宮古・八重山諸島に分布しており<sup>10</sup>、ニシカジも同様の分布特徴を見せている。沖縄本島では、ニシカジとミーニシとが同じ北風を意味として同一の3地点に掲出されている。ただ、この各地点内でのアンケート調査の対象話者、記録の実際については、たとえば回答が同一話者によるものかなど、『事典』の記載範囲からは判断できない。本稿では、これを同一地点での「併記」と表現して処理しておく。北風における、この併記地点について、各語の意味特徴の記述を取り出し、一覧したのが表1である。『事典』の意味記述の文から抽出した意味特徴は、風の強

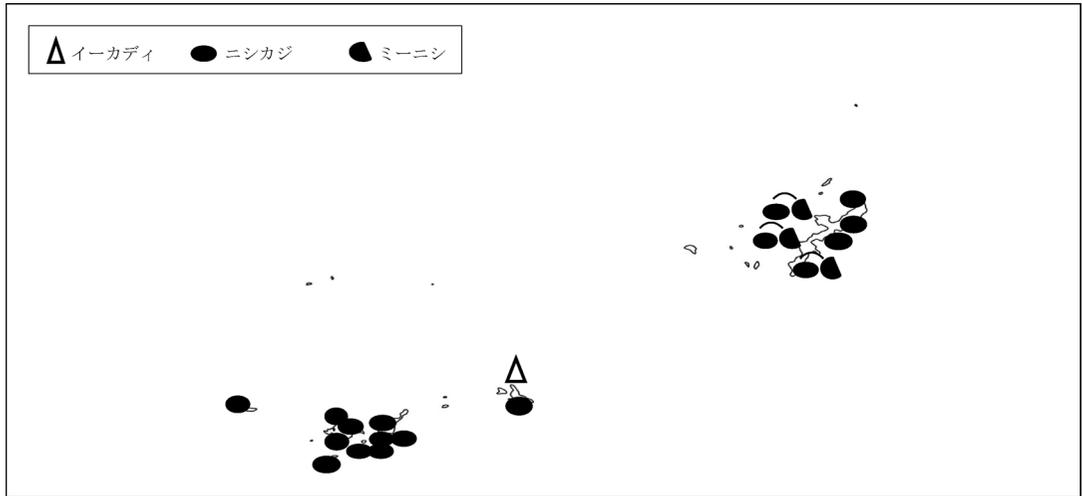


図1. 北風の分布

表1. 北風を表す語の併記地点と意味特徴

| 地点/語             | 特徴   | 強弱 | 時季<br>(月)            | 温度 | 天候 | 海の<br>状態 | 操業の<br>適否 |
|------------------|------|----|----------------------|----|----|----------|-----------|
| 国頭郡伊江村川平         | ニシカジ | -  | -                    | -  | -  | -        | -         |
|                  | ミーニシ | ×  | 冬、10月<br>~11月に<br>多い | -  | -  | -        | -         |
| 強く吹き荒れる。20~30日吹く |      |    |                      |    |    |          |           |
| 中頭郡読谷村都屋         | ニシカジ | ×  | 旧8月、<br>彼岸~2<br>月彼岸  | ×  | -  | -        | ×         |
|                  | ミーニシ | -  | 冬にうつ<br>る前           | -  | -  | -        | -         |
| 島尻郡与那原町板良敷       | ニシカジ | -  | -                    | -  | -  | -        | -         |
|                  | ミーニシ | -  | 冬                    | -  | -  | ×        | △         |
| 危険はない            |      |    |                      |    |    |          |           |

○ 弱い/良い/暖かい    × 強い/低い/悪い/適さない    △ 中程度    - 記載なし

<sup>10</sup> 中本 (1982) 278 ページ。

弱、吹く時季、風が吹く時の温度、天候、海の状態のほか、漁師が海上で操業を行うのに適する風かどうかの6項目である。3地点で、北風を意味とするニシカジとミーニシとが併記されている。

国立国語研究所編（1963）による首里での用例によれば、ミーニシは、「秋頃に吹き始める北風」とある。内間・野原（2006）の那覇市における例では、「秋から初冬頃にかけて吹く北風。冬の訪れを感じさせる」とある。『事典』においても、沖縄本島地点での例に限られ、ほぼ秋から冬の季節風であることが判断できる記載である。通常の北風を表すニシカジに対して、ミーニシが季節風として区別されていることがわかる。また、ニシカジは比較的強風であることも記載内容から判断される。

### 3.1.2. 北東風

基本8風位の一つである北東風の記載は、図2に見るように、隣接する北風と東風に比べ、用例数が少ない。特に沖縄本島では、中頭郡読谷村都屋でのシガイカジ1語のみである。一方、八重山地方では収載地点が多く、トゥラスファカジが8地点に集中して分布しているのが特徴である。この語は、尚学図書編（1989）には立項されていないが、宮古地方でも使用されている<sup>11</sup>。このほか、図2では、池間島にウストラカディがある。十二支を利用した方位語「ウシトラ」を用いた「ウシトラカゼ（丑寅風、艮風）」は、尚学図書編（1989）では、主に、北東の風として茨城のほか滋賀、九州などに語例が載るが、沖縄地方での用例はない。筆者のこれまでの調査では、池間島でのウスヌファカジ（北北東風）、伊良部島でのトゥラスファカジ（東風）などの語例がある<sup>12</sup>。

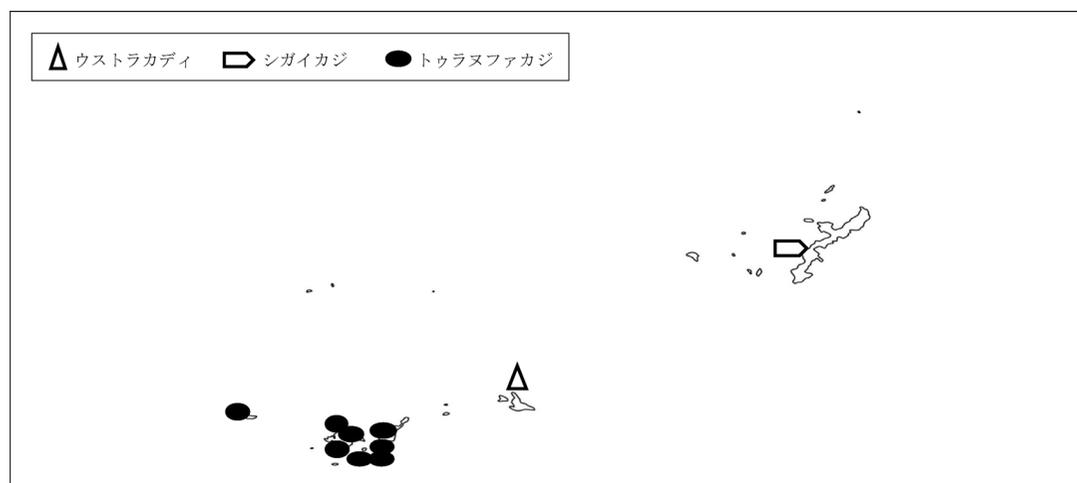


図2. 北東風の分布

<sup>11</sup> 伊良部島での使用例は、東北東や東の風を指すことが多く、志村（2007a）、同（2007b）、同（2008）で述べた。また、筆者による2013年までの池間島での漁業従事者を対象とした調査でも、東風での使用を確認している。池間島の調査結果については、別途発表予定である。

<sup>12</sup> 2013年までの池間島での調査のほか、志村（2007a）、同（2008）などによる。

### 3.1.3. 東風

東風を表す語は、図3に見るように、比較的用例数が多い。アガリは、奄美・沖縄地方では、東を表す語として広範囲に分布する語である。『事典』でも、沖縄本島から八重山地方にかけて、アガリカジとその変異形のアーリーカジが広く分布する<sup>13</sup>。一方、沖縄本島にまとまって分布しているのが、クチカジ・クチブキで、「クチ」は「コチ（東風）」の変異形である。なお、クチカジの収載地点には、「南島地方」の広域地点表示が含まれる<sup>14</sup>。尚学図書編（1989）、内間・野原（2006）には、それぞれ「クチ」「クチブキ」「クチカジ」が、ともに東風を表して沖縄本島での用例となっている。下野（1980）にも、沖縄本島各地でクチカジが東風を表す例が報告されている<sup>15</sup>。

なお、併記地点である金武のアガリカジとクチカジには、区別に関する説明記述がない。このほか、池間島のンスカディンは、他地点では北風を表す「ニシカジ」と見られ、池間島での風位語が右回りにずれた体系を持つことがうかがわれる（後述）。

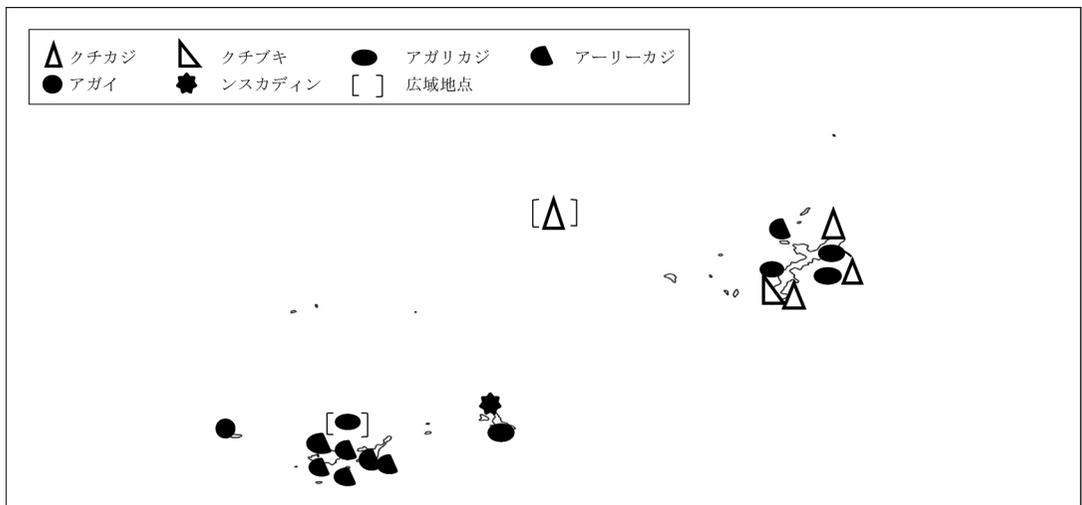


図3. 東風の分布

### 3.1.4. 南東風

図4から、八重山地方に「午の方位の風」を意味するシマヌハカジがまとまって分布することがわかる。『事典』での宮古地方への立項はないが、伊良部島や池間島での筆者の調査でも、南東ないし南風位を指す語として使用されていることを確認している<sup>16</sup>。一方、沖縄本島での南東風の報告は2地点と少ない。このうち、ミンニハジは、「巳の風」と見られ、鳩間島にはミーフアカジがある。アカイベーは、「東南」を表す「アガリハイ」と考えられる。池間島にはアカウラカディ

<sup>13</sup> 図3のなかで、『事典』での使用地点が、広域名「八重山郡」となっているアガリカジについては、記号を [ ] で囲み、石垣島の北西方向に表示した。

<sup>14</sup> 注13同様、広域名「南島地方」では記号を [ ] で囲み、地図中央部に表示した。

<sup>15</sup> 同書273ページ。

<sup>16</sup> 注12に同じ。

があり、筆者の調査でも東を中心とした風位を表すことを確認している<sup>17</sup>。



図4. 南東風の分布

### 3.1.5. 南風

南風は、図5のように、全地点がハエ系の語で占められている。「ハエー」を前部要素に持つ語には丸型の記号を与え、後部要素に持つ複合語には星形系統の記号で表した。ハイカジ・ハイスカジ類は、沖縄本島から宮古、八重山まで広く分布している。特に、沖縄本島での h 音の表記「ハイ」「ヘー」「ヘエ」が多いことも、実際の音声特徴をよく反映した形と言える。ただし、現在も沖縄本島中北部、宮古のほか、与那国を除く八重山の各地で確認できる、ハ行音の頭子音 p 音を示す「パイ」の表記がまったく現れていないことに気付く。特に、宮古・八重山に見える「バイカジ」のような b 音の記載が特徴的である。尚学図書編（1989）の「音韻総覧」によれば、語頭のハ行子音においては、奄美・沖縄本島・宮古・八重山の各地方ともに、b 音は表示されていない<sup>18</sup>。また同書収載の「南風」を表すハエ類各語の頭子音の表記にも、「バ」がないことがわかる<sup>19</sup>。「第二部」の「バイカジ」の見出し語は、p 音の頭子音を持つ「パイカジ」を表した可能性もあり、「バイカジ」には、調査時に起因する、語の表記上の問題が存在しているかもしれない<sup>20</sup>。

併記地点である国頭郡伊江村におけるバイカジとヘーブチは、区別の説明記述がない。ほかの併記地点である、島尻郡与那原町板良敷と平良市池間について、各語の意味特徴の記述を取り出し、

<sup>17</sup> 2013年までの池間島での漁業従事者を対象とした調査による。

<sup>18</sup> 「ハ行の子音（語頭）」（65ページ）による。

<sup>19</sup> 同書下巻「はえ」（1878ページ）、および別巻索引「みなみかぜ（南風）」（1108-1109ページ）による。

<sup>20</sup> もとより『事典』「第二部」は、得られたアンケートの回答表記を見出し語として編集されたものであって、このような表記に関わる問題はあらゆる語に存在する。ここでは、p音がb音で発音される例が含まれていた可能性のほかにも、アンケート用紙に「バ」と表記する際、「バ」と書かれる傾向もあったかもしれない。なお、『事典』「第一部」の「ハイ・ハエ」の項目では、沖縄地方の「ハエ」類について全く触れられていない。

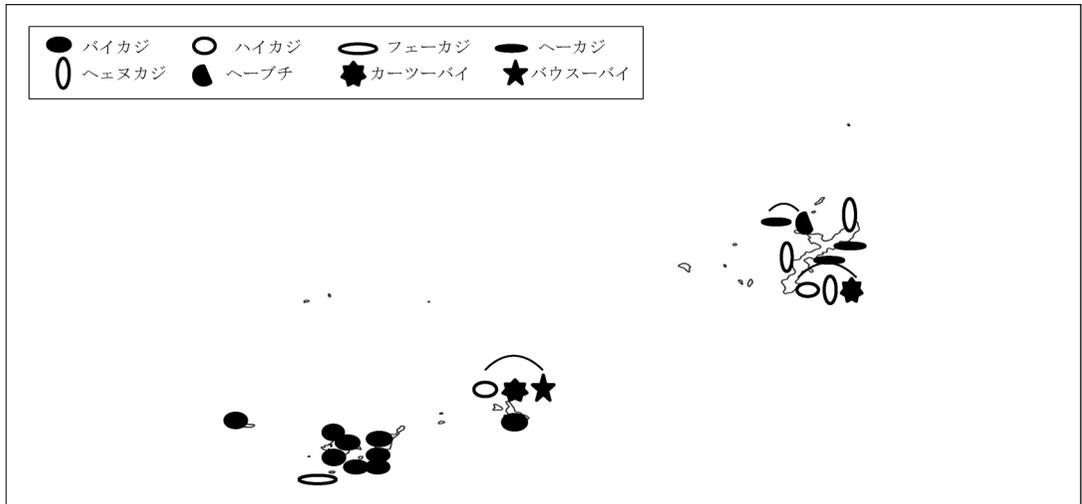


図5. 南風の分布

表2. 南風を表す語の併記地点と意味特徴

| 地点/語       |        | 特徴                 | 強弱    | 時季<br>(月) | 温度 | 天候 | 海の<br>状態 | 操業の<br>適否 |
|------------|--------|--------------------|-------|-----------|----|----|----------|-----------|
| 島尻郡与那原町板良敷 | バイカジ   |                    | -     | -         | -  | -  | -        | -         |
|            | カーツーバイ |                    | ×     | 夏至        | △  | -  | -        | ○         |
| 平良市池間      | ハイカディ  |                    | × → ○ | 芒種など      | -  | -  | -        | -         |
|            |        | 芒種のハイカディは夜はなぎ、昼に強い |       |           |    |    |          |           |
|            | カーツーバイ |                    | ×     | 夏至        | -  | -  | -        | -         |
|            |        | 7-10 m/秒、10日くらい続く  |       |           |    |    |          |           |
| バウスーバイ     |        | × → ○              | 芒種    | -         | -  | -  | -        |           |
|            |        | 風速 10~13 m/秒、16日続く |       |           |    |    |          |           |

○ 弱い/良い/暖かい    × 強い/低い/悪い/適さない    △ 中程度    → 状態の変化    - 記載なし

一覧したのが表2である。

2地点に収載されたカーツーバイは、夏至の頃の南風で、10日間程度続く強風である。この季節風が、通常の南風であるバイカジと使い分けられている形を読み取ることができる。ただし、池間島では、芒種の頃の風であるバウスーバイとの違いが見えるほか、バイカゼに「芒種など」「芒種のハイカディは」の説明が付され、バイカジ自体が季節風の要素も持つことを示唆している<sup>21</sup>。

### 3.1.6. 西風

図6のイリカジでは、イーリカジ・イリハジ・イルカジ・イリヌカジ・イル等も一括した。西方向を表すイルやイリは、奄美・沖縄地方で、正反対方向の東を表すアガリと対になって、広範囲に

<sup>21</sup> 「ハイカジ」と季節の関係は、志村(2007a)、同(2007b)等で示した。

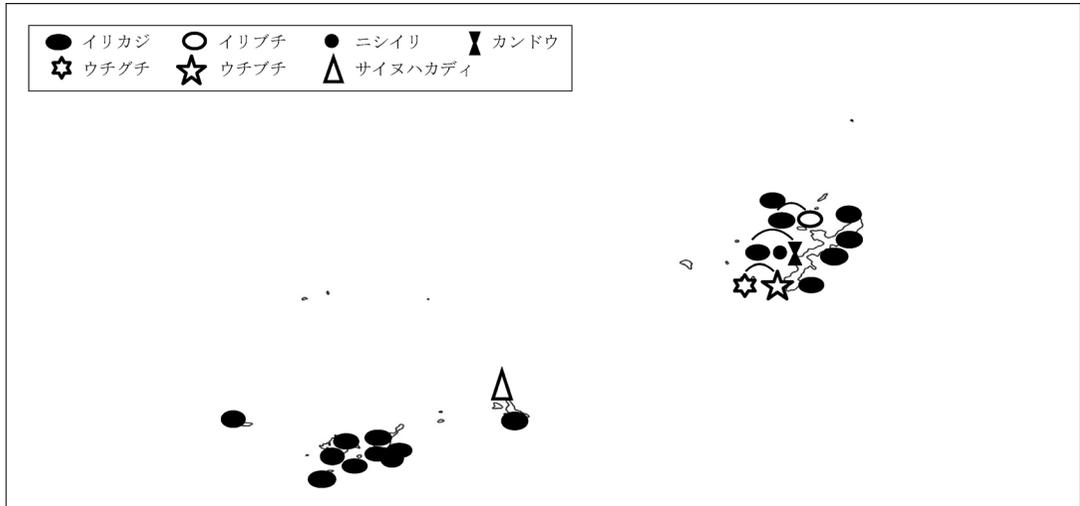


図6. 西風の分布

分布している語である。特に沖縄本島・宮古・八重山ではニシよりも優勢な分布が認められる<sup>22</sup>。『事典』におけるイリカジも、沖縄本島から宮古、八重山まで、広い地域で分布が確認できる。八重山地方では、イリカジでまとまりを見せるが、沖縄本島では、ウチグチ・ウチブチが見えるほか、イリブチ、ニシイリ、カンドウが併記されている。これら、併記地点である国頭村伊江村のイリカジとイリブチ、および中頭郡読谷村都屋でのイリカジ・ニシイリ・カンドウには、区別に関する説明記述がない。池間島のサイヌハカヂは、南西から西系統の語として、十二支の「申」の方向から吹く風として用いられる<sup>23</sup>。

### 3.1.7. 南西風

南西風では、図7に見るように、八重山地方でのサンヌパカジのまとまりが特徴的な分布である。「申」を語源とする、池間島の西風として収載されている前述のサイヌハカヂに対して、八重山では同源のサンヌパカジが南西風で収載されていることがわかる。

### 3.1.8. 北西風

図8で確認できる通り、八重山地方でのニヌパカジ・ニヌフリカジのまとまった分布が目立つ。併記地点である石垣市石垣島のニヌパカジとニヌフリカジには、区別に関する説明記述がない。「ニヌパカジ」系統の語は、十二支の「子」によった語であり、宮古地方などでは北風位を指す語として使用されているが<sup>24</sup>、『事典』での八重山地方では、左回りに寄った北西風を指していることがわかる。

<sup>22</sup> 中本(1982) 275-276 ページ。

<sup>23</sup> 注12に同じ。

<sup>24</sup> 注12に同じ。

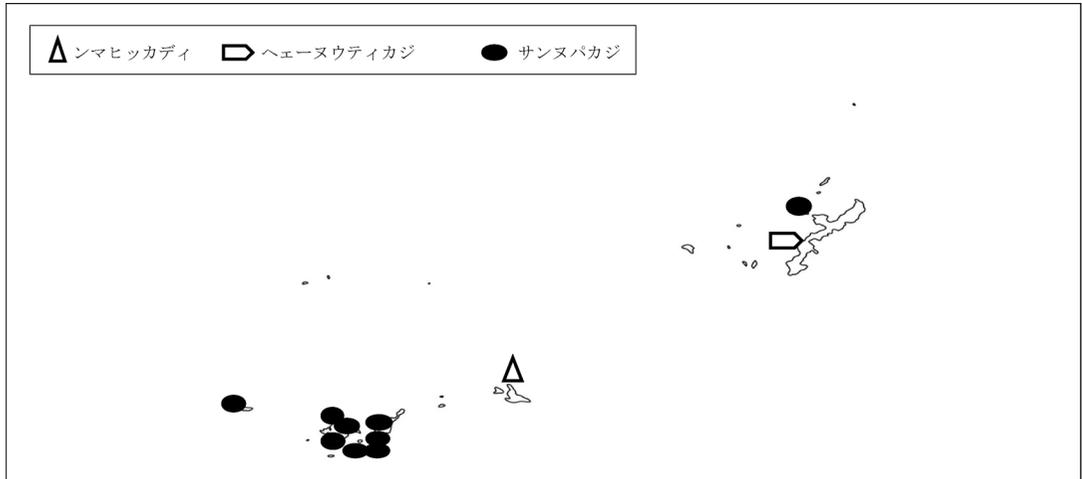


図7. 南西風の分布

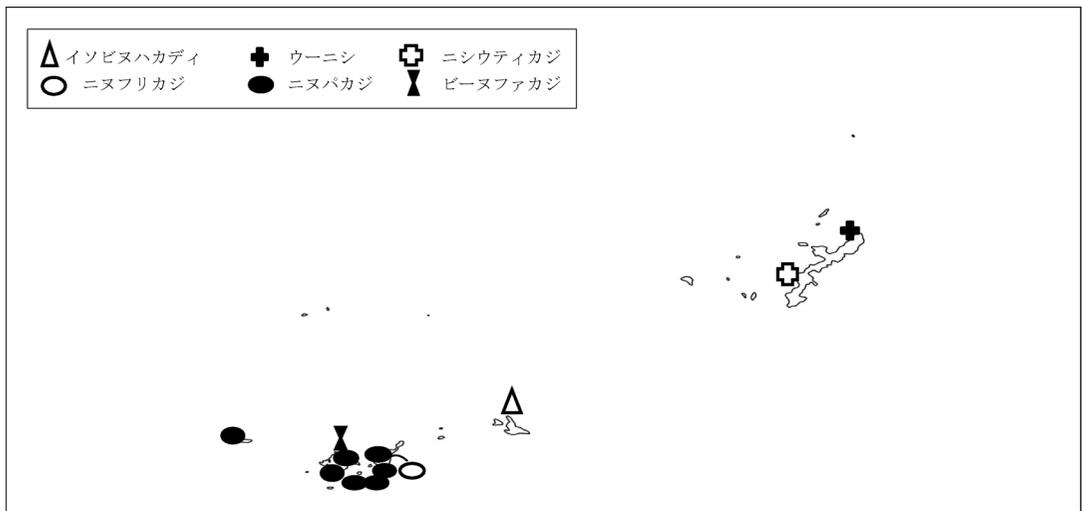


図8. 北西風の分布

### 3.1.9. 北北西風

北北西風を指示する語は、図9の通り、1地点の1例のみであった。この池間島のウーイーカディは、筆者の池間島での調査でも北西から北北西を指示する風位語として、使用の事実を確認している<sup>25</sup>。

### 3.1.10. 南南東風

図10にあるように、南南東風では、池間島での1地点1例のみの分布となっている。『事典』の解説には、「島の流れにそって吹く風」との記述がある。

<sup>25</sup> 2013年までの池間島での漁業従事者を対象とした調査で確認している。

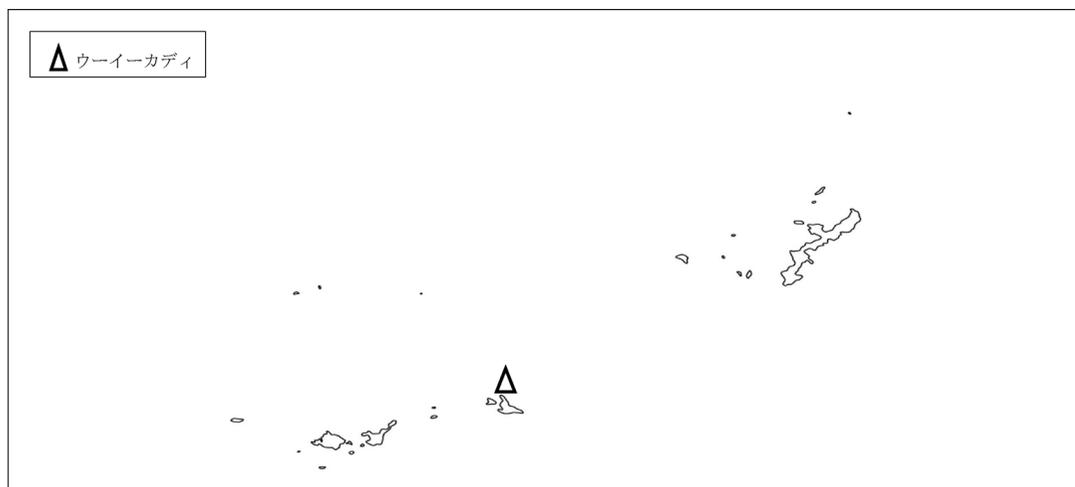


図9. 北北西風の分布

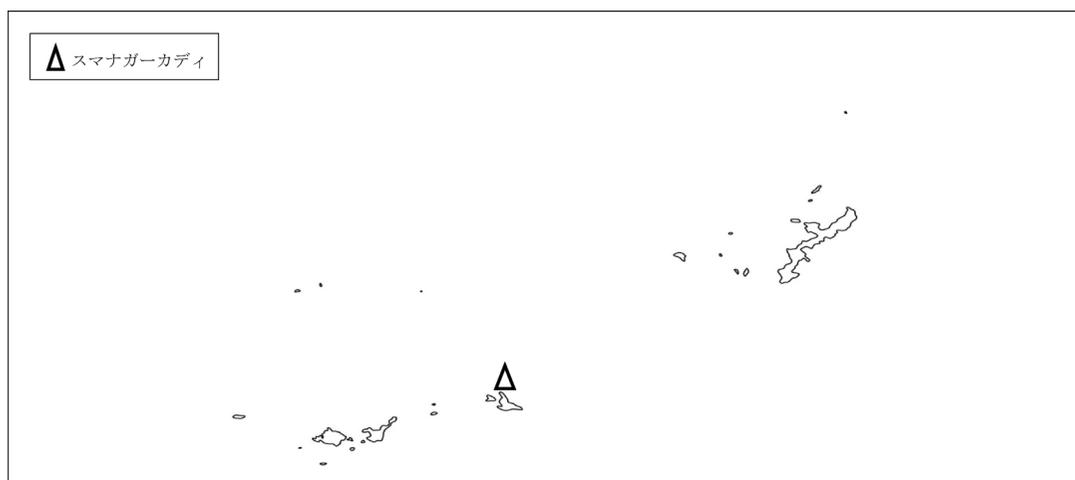


図10. 南南東風の分布

### 3.1.11. 収載のない風位語

沖縄本島の場合、単一風位に見る風位語では、7地点からの情報が掲載されていることもあり、比較的多くの異なり語を含んだ記述内容を持っていると判断される。ただし、下野（1980）のなかで沖縄本島・八重山での北風に用例が見られる「ニーヌファノカジ」「ニーヌファブチ」「ネーヌパーカジ」などのニヌパカジ類が、沖縄本島には収載されておらず、北西風での八重山だけに現れていること等、データには留意すべき面もあると考えられる。これらの語は筆者の調査では、宮古島地方でも自然方位での北風を指して頻繁に使われている<sup>26</sup>。また、『事典』の南西諸島以外の地域では、キタ、キタカゼ、ヒガシなどの共通語形も報告されているが、沖縄地方では全く収載され

<sup>26</sup> 志村（2008）3-4ページ。

ていないことも本書の特徴として指摘することができる。

### 3.2. 風位変化および不特定風位を表す風位語

前項では、『事典』収載の風位語彙のうち、その語の意味に単一の指示風位が記載されているものを、作成した分布図とともに考察した。一方、これ以外の『事典』の収載語には、指示する風位が単一ではなく、複数の風位を指示して相互の風位間に連続する風の変化がある語も立項され、また、指示風位のない語も見える。これらは、旧暦2月頃に発生する「ニガチカジマーイ」と、旧暦4月に吹く「シガチフキアゲ」を捉えた季節風のほか、台風時に起こるとされる風の現象を示した語となっている。

#### 3.2.1. ニガチカジマーイ

表3は、風位変化を意味記述として解説した各地点の語のうち、旧暦2月頃に発生する暴風である「ニガチカジマーイ」と判断される語を一覧したものである。沖縄本島地方4地点と八重山地方1地点の合計5地点での報告となっている。表記された語形をまとめると、ニガツカジマーイ（ニンガチカジマーヤー、ニングワチカジャーイ）、カジマーイ（カジマアイ、カジマヤヤー）、マーイ（マヤー）の3語からなる。

国立国語研究所編（1963）では、「カジマーイ」を「風が回ること。風向きが変わること」と説明する。筆者による伊良部島や池間島での調査では、カジマーイ（風回り）は、東南から南の風が

表3. ニガチカジマーイの記載地点と意味特徴

| 地点/語       |            | 特徴                         | 風向 | 強弱         | 時季<br>(月) | 温度 | 天候 | 海の<br>状態 | 操業の<br>適否 |
|------------|------------|----------------------------|----|------------|-----------|----|----|----------|-----------|
| 国頭郡国頭村辺土名  | カジマアイ      | 南→北                        | ×  | 冬          | -         | -  | ×  | ×        |           |
|            |            | 南がすぐ北になり大時化となる             |    |            |           |    |    |          |           |
|            |            | 南風になったら一人子には海を渡る旅をさせるなどという |    |            |           |    |    |          |           |
| 島尻郡与那原町板良敷 | カジマアイ      | 南→西<br>→北                  | ×  | 旧2月<br>~3月 | -         | -  | -  | △        |           |
|            |            | 15 m/秒、約1時間続く。危険少し         |    |            |           |    |    |          |           |
|            | ニンガチカジマーヤー | 南→西<br>→北                  | ×  | 旧2月        | -         | ×  | ×  | ×        |           |
|            |            | 風速20 m/秒、3時間は持続、漁船被害、現在はない |    |            |           |    |    |          |           |
| 中頭郡読谷村都屋   | ニングワチカジャーイ | 東→南                        | -  | 旧2月        | -         | -  | -  | -        |           |
|            |            | 東から南にうつる分れ風                |    |            |           |    |    |          |           |
| 国頭郡金武村金武   | マヤー        | -                          | ×  | 2月         | -         | ×  | ×  | ×        |           |
|            |            | 突然風がまわり台風状態。非常に危険な風        |    |            |           |    |    |          |           |
| 八重山郡与那国町   | カジマヤヤー     | -                          | ×  | 旧2月<br>~3月 | -         | -  | ×  | ×        |           |
|            |            | 台湾ボウズのこと                   |    |            |           |    |    |          |           |

× 強い/低い/悪い/適さない    △ 中程度    → 状態の変化    - 記載なし

西風に変化し、最終的に強い北風のイーカジに変化する、時計回りのイーカジマーイが代表的で、漁師にとっては、向後の天候予測には欠かせない、警戒の必要な風位変化を捉えた語であることが明らかになっている。このカジマーイのうち、旧暦2月頃の暴風は、漁業従事者には最も注意が払われる風で、南風が急に北に回って変化するため、発生の予測が難しい風として知られている。これを「ニガツカジマーイ」と呼んでいる<sup>27</sup>。

表3に見えるように、5地点の風には、「ニンガチカジマーヤー」などのほか、単に「カジマーイ」と記された語、また「マーヤー」も見える。しかし、すべて旧暦2月から3月ないしは冬などの時季に限られた記述であり、風向には、南ないし東から時計回りに向かう性質がうかがわれる。また強風の記述もあることなどから、すべてがニガチカジマーイの現象を指しているものと考えられる。

このように、『事典』では、極めて用例の少ない、風位変化を表す語の多くの例にニガツカジマーイが記載され、沖縄地方の風位語彙を特徴付けていることになる。

### 3.2.2. シガチフキアゲ

表4は、「シングワチフキアゲ」「シングワチ・フチャーギ」の表記で記載されている語の情報を整理したものである。ともに旧暦4月に1時間から2時間にわたって吹く強風であり、指示風位は記載されていない。ニガチカジマーイ同様、警戒すべき強風となる季節風として、漁業従事者に使われていたものと見られる。

このほか、残る1例は、島尻郡与那原町板良敷に「カゼフーチン ケーセウタニ」とする見出し語があり、「台風が吹いたら返しがうつという意。東より台風がくると、吹き終えたら反対の西より返さ(ママ)の風が吹く」との説明がある。風位変化を示す表現と考えられる。

表4. シガチフキアゲの記載地点と意味特徴

| 地点/語     |             | 特徴 | 風向                   | 強弱        | 時季<br>(月) | 温度 | 天候  | 海の<br>状態 | 操業の<br>適否 |
|----------|-------------|----|----------------------|-----------|-----------|----|-----|----------|-----------|
|          |             |    | 国頭郡国頭村辺土名            | シングワチフキアゲ | -         | ×  | 旧4月 | -        | -         |
|          |             |    | 小さい雨雲から吹き荒れる。1~2時間吹く |           |           |    |     |          |           |
| 中頭郡読谷村都屋 | シングワチ・フチャーギ | -  | ×                    | 旧4月       | -         | -  | -   | ○        |           |
|          |             |    | たつまきのような風。1~2時間吹く    |           |           |    |     |          |           |

○ 弱い/良い/暖かい    × 強い/低い/悪い/適さない    - 記載なし

## 4. 指示風位から見る風位語彙の部分体系

### 4.1. 『事典』の記述と語彙体系

『事典』では、全編にわたり、語彙を体系的に扱う視点がない。「第二部」では風位語を五十音順

<sup>27</sup> 2013年までの池間島での調査結果のほか、志村(2007a)、同(2008)、また柴田(1974)などによる。

に収録した形式であり、このデータなどを利用して展開された「第一部」の風位語の解説でも、見出しとなる語について、当該の語のみを対象に意味の記述と考察が進められている。したがって、特定地域で使用される一つ一つの風位語は把握できても、地点ごとに存在する複数の語彙の特徴、たとえば、地域全体としてどのような語があり、いくつの風位を持っているか、また、意味特徴を形成する、風の強弱、時季、温度、天候、海上での操業の適否などを総合的に把握することまでは難しくなっている。

しかし、風位語彙は、地域ごとに観察される体系のほかにも、漁業従事者が持つ風への認識や関心、操業の適否についての判断等が包含された社会差によって形成されたバリエーションを持ち合わせている。漁業関係者を対象として語彙が収集された『事典』の性格を利用すれば、限られた数のデータであっても、語彙の体系的側面がある程度把握できると思われる。

これまで筆者は、語彙の使用者個人を単位とした、個人語彙の体系を記述、観察することが、方言語彙研究では肝要と考えてきた<sup>28</sup>。一方、特定の個人語を利用したものとは確定しにくい、本事典の記載事項からなる資料によって提示できる語彙体系の性質は、あくまでデータの単なる寄せ集めや総合であって、実際に用いられる方言語彙としての体系からは離れたものかもしれない。しかし、語彙構造のなかに、少なくとも地域ごとに異なる語彙特徴と、当該地点に存在して報告された、さまざまな意味特徴を比較して現れる差異を観察することは可能である。本項目では、『事典』の記述形式のままでは読み取れない、こうした語彙面からの意味特徴を、語彙の部分体系とみなして考察を進める。

#### 4.2. 指示風位から見る風位語彙体系

風位語彙には、これまでに取りあげたように、意味特徴の一つとなる指示風位がある。ここでは、指示風位に着目し、語彙の体系差および分布と特徴を述べることにしたい。

既に見たように、『事典』における沖縄地方の風位語彙は、各語の説明が比較的簡素である。前述した併記項目に含まれる季節風や、風位変化を表す語、特定風位のない語では、説明部分が多くなる傾向があるが、それ以外の語項目では、語の指示する風向を記しただけの意味記述が多い。この風向の記述に注目し、各語が指示する風向の数（風位数）を整理し、地点ごとに分布図（図 11）として示した<sup>29</sup>。

『事典』収録語に見える採集地点の掲出は、既に 2.1. でも触れたように、広域の地名表示も混在しているなど、資料収集方法に起因すると思われる部分もありうる<sup>30</sup>。図 11 で、風位数が極端に少ない、那覇市首里(2)、石垣市石垣島白保(3)、石垣市大浜(1)、八重山郡竹富町波照間島(3)な

<sup>28</sup> 志村（2007a）25-26 ページ、等。

<sup>29</sup> 図中、『事典』に「八重山郡」と記された、東風を表す「アガリカジ」部分は、八重山地方上方に [1] と記載した。また、地点名が「南島地方」と表示された「アガリカジ」1 例はカウントせず、ここでは表示をしない。

<sup>30</sup> アンケートの回答は、調査票が送付された各地点の地名や、著者関口の指示に従い、字単位までの記入を求められたことが判断できるが、一方で回答者が、語の使用地域を広域地名で指定したケースが含まれたことも考えられなくもない。また、柳田（1942）からの資料の引用による広域地名の存在もありうる。

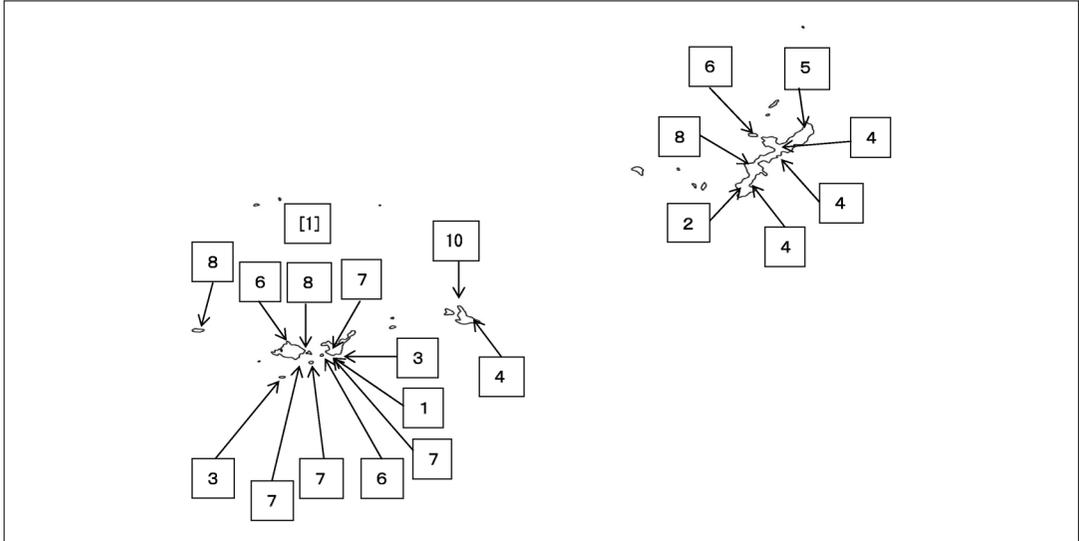


図 11. 地点別風位数

ど（括弧内は風位数）は、実際の当該地で典型的に用いられる風位語が揃っていない可能性が高い。こうした資料上の制約を踏まえながら、特徴を見ることにする。

風位数は、沖縄本島では比較的少なく、八重山地方においては多い傾向が見える。沖縄本島の太平洋側では、4風位型の体系となっている。沖縄地方では、東西南北を表す方位を表す語の組み合わせとして、東をアガリ、西をイリ、南をフェー、北をニシと言う地域が多いことは、各種の言語地図でも確認され、代表的な語として紹介されることも多い<sup>31</sup>。

各語が指し示す方位を手がかりに、名護市仲尾次地点の語彙の構造を示すと、図 12 のようになる<sup>32</sup>。北から時計回りに、ニシカジ・アガリカジ・ヘーカジ（ヘエカジ）・イリカジとなる構造は、沖縄地方で最もよく見られる形であり、宮古郡宮古島でも同型の体系をしている。報告された風位語がともに3で少なかった、石垣市石垣島白保や八重山郡竹富町波照間島でも、この4つの風位語による体系がうかがえる。この4軸を体系の内部に持ちながら同語を持つ地点は、『事典』の21地点のなかで8地点となり、沖縄本島、宮古、八重山の地域間での偏りは見られなかった。

八重山に典型的に見られるのが、次に示す8風位型の体系である（図 13）。前述の4軸の風位語を包摂しながら、基本8風位を備えており、北東がトゥラヌファカジ（トゥラヌワカンジ）、南東にンヌヌファカジ（ンヌヌワカンジ）、南西にサンヌパカジ（サンヌワカンジ）、北西にニヌパカジ（ニヌワカンジ）という、十二支の語を持っている。この八重山郡竹富町小浜島と同じ型が八重山郡与那国町にある。また、1風位の欠けがあり、他は同じ語で構成された7風位となるのが、北風位がない石垣市石垣島、東風位のない石垣市真栄里、南東風位がない八重山郡竹富町黒島であ

<sup>31</sup> 中本（1982）など。

<sup>32</sup> 個人語を対象として詳細に調査すると、隣接する風位との部分的な意味の重なりや、語の表す風位の広狭が現れることが多く、別形式での作図が必要（志村 2008 など）になるが、ここでは資料上の制約から、本図のような図形式を用いる。

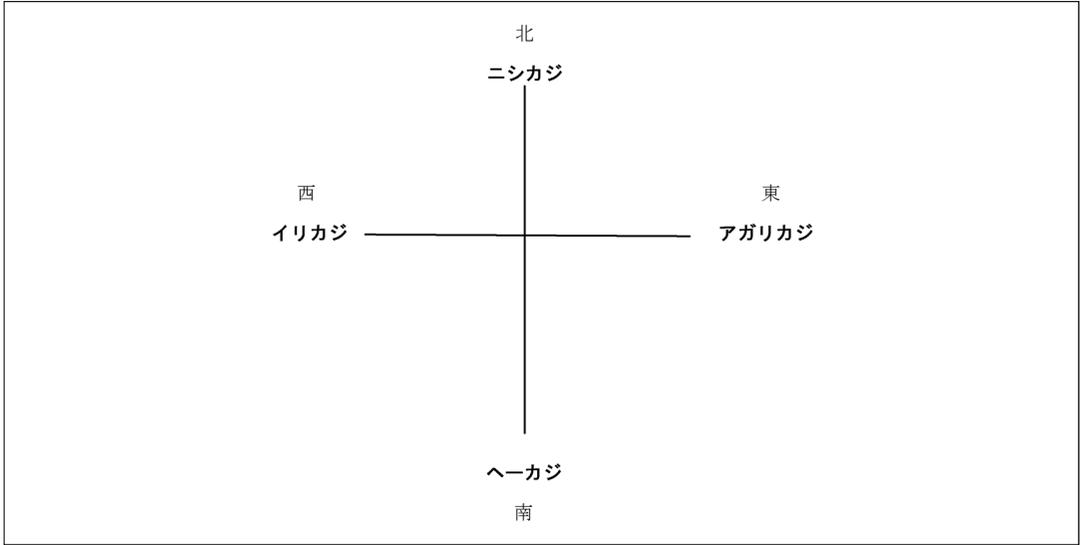


図 12. 風位語彙と指示風位〈名護市仲尾次〉

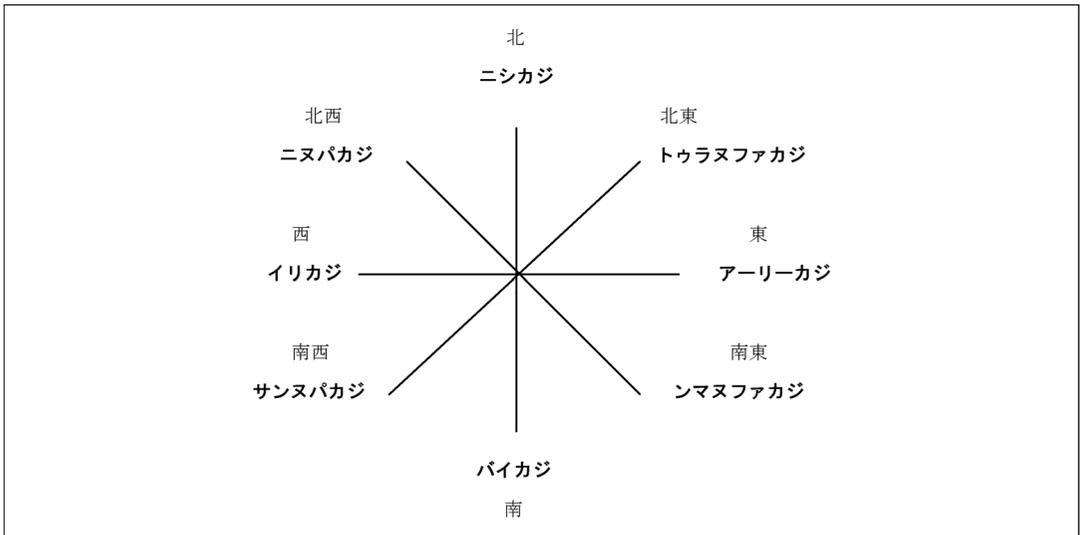


図 13. 風位語彙と指示風位〈八重山郡竹富町小浜島〉

る。また、同じ6風位の八重山郡竹富町竹富島では、東および西風位がない。このほかの6風位の地点には、国頭郡伊江村川平と八重山郡竹富町鳩間島がある。それぞれ北東・北西、南西・西を欠くが、先の4風位語を持ち併せながら、南東がそれぞれミンニハジ、ミヌファカジと同語で構成される。

一方、上記の4風位型や8風位型などとは異なる語彙体系を持ち、『事典』の沖縄地方で最も多い10の風位数を持ち、12の風位語が記録されているのが平良市池間である（図14）。

平良市池間の風位語彙では、北、東、西のそれぞれの軸に、典型的な4つの風位語とは異なる語が入り込み、イーカディ(北)、ンスカディン(東)、ハイカディ・カーツーバイ・バウスーバイ(南)、

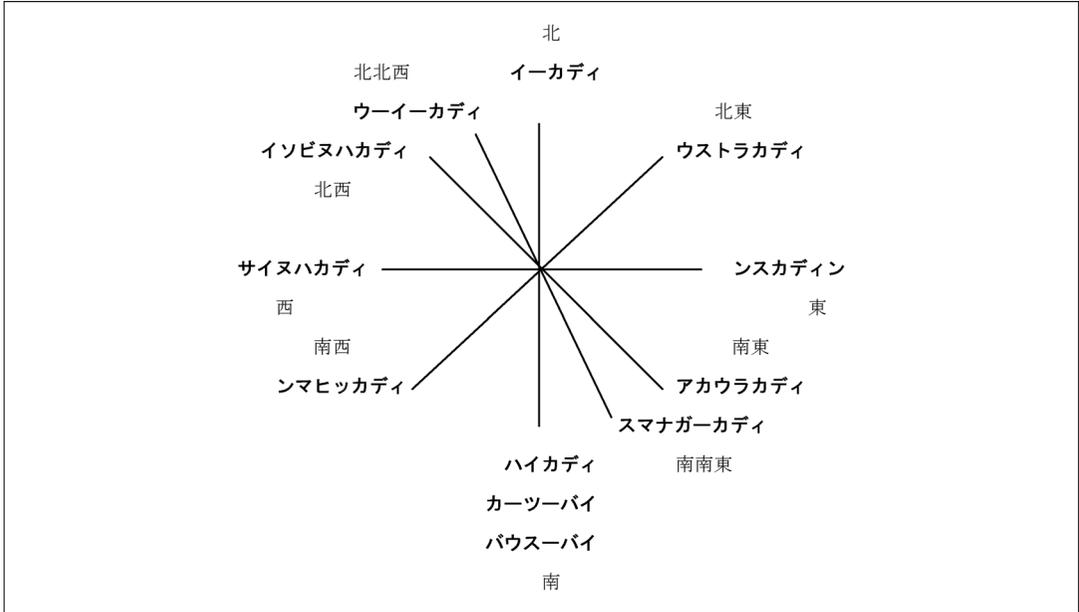


図 14. 風位語彙と指示風位〈平良市池間〉

サイヌハカディ(西)の構成である。この構造は、同じ池間方言を持つ伊良部島佐良浜方言での風位語彙の体系に近い<sup>33</sup>。ンスカディン-ハイカディの軸が正対せず、イーカディが北風位を指す構造は、『事典』からうかがえる他の沖縄地域の体系と比較すると、右に回転させた形でのずれが見られる。また、南南東や北北西風位を表す語が存在することも特徴で、沖縄地方の他の地点には見られない、微細な風位間に語が配置された構造を持つ。このほか、既に表2で示したように、南風位に見られる季節風での語の使い分けも存在している。

このように、指示風位から構成される風位語彙の部分体系では、沖縄本島地方での4軸からなる簡素な構造、八重山地方での8軸型に見られる分布の等質性、そして、池間島の特殊性という、3種の型が特徴として現れた<sup>34</sup>。

おわりに

沖縄地方の風位語彙について、これまで風位語彙研究にほとんど利用されたことのない『風の事典』の収載語を資料として、分布の特徴と語彙体系の差異を考察した。この結果、主として以下のことを明らかにした。

- (1) 方位を意味単位とする風位語の分布には、ある程度のまとまりがみられ、特に八重山地方での共通性が現れている。

<sup>33</sup> 志村(2008)2-4ページ。  
<sup>34</sup> 注11でも言及したように、池間島での漁業従事者を対象とした風位語彙の臨地調査の結果については、別途発表予定である。

(2) 季節風を表す語のほか、風位変化を表す特徴的な語が分布している。

(3) 指示風位がつくる風位語彙体系には地点差があるが、おおむね3種の型が観察される。

本稿では、沖縄地方という限られた地域内での分析となった。今後は、『風の事典』の豊富な情報を利用した奄美地方も含めた南西諸島全体での分布特徴を明らかにしたい。また、宮古島・伊良部島地方で継続している臨地調査の結果を使用し、両者の結果をつきあわせながら、考察を進めたい。

## 参考文献

- 内間直仁・野原三義 (2006) 『沖縄語辞典－那覇方言を中心に－』 研究社
- 国立国語研究所編 (1963) 『沖縄語辞典』 大蔵省印刷局
- 柴田 武 (1974) 「沖縄・宮古島方言の風と雨」『言語生活』 275, 18-28
- 柴田 武 (1988) 『語彙論の方法』 三省堂
- 志村文隆 (2007a) 「沖縄・伊良部島における漁業従事者の風位語彙」『人文社会科学論叢』 16, 25-41
- 志村文隆 (2007b) 「沖縄・伊良部島における追い込み漁従事者の風位語彙体系」『台湾・フィリピン・八重山地方における海洋伝承の比較研究－オーストロネシア系基層文化の追究－』(平成17年度～平成18年度科学研究費補助金研究成果報告書〈研究代表者 後藤明〉), 73-101
- 志村文隆 (2008) 「沖縄県伊良部島方言の風位語彙－生業との関係を中心に－」『国語学研究』 47, 1-12
- 下野敏見 (1980) 『南西諸島の民俗Ⅰ』 法政大学出版局
- 尚学図書編 (1989) 『日本方言大辞典』 小学館
- 関口 武 (1985) 『風の事典』 原書房
- 中本正智 (1982) 「方位に関する語彙－東西南北の分布と変遷－」『奄美自然・文化・社会』, 274-280
- 中山正典 (2009) 『風と環境の民俗』 吉川弘文館
- 柳田国男編 (1942) 『増補風位考資料』 明世堂書店

# The Dialect Distribution of *Fūi'go* words in Okinawa Prefecture

—Based on *Kaze-no-Jiten* (the Encyclopedia of the Wind)—

SHIMURA Fumitaka

This paper revealed the dialect distribution and the property of *Fūi'go* words, which represent wind direction, used in Okinawa district, based on the words included in *Kaze-no-Jiten* written by Sekiguchi Takeshi.

In this encyclopedia, 2036 Japanese words that representing wind direction were collected through a questionnaire carried out throughout of Japan, but there is almost no research on *Fūi'go* words using this book. This paper proposed a distribution map of *Fūi'go* words in Okinawa district by using the information about the place and the meaning which is appended to each word in this encyclopedia. In addition, this paper classified the nature of the wind described by each *Fūi'go* word, and examined its distinctive features.

The findings in this analysis are as follows:

- (1) A regional similarity is observed in the distribution of *Fūi'go* words. Especially the similarity in Yaeyama district is obvious.
- (2) Some distinctive words showing a change of wind direction as well as the words showing a seasonal wind are distributed.
- (3) There are regional differences with respect to *Fūi'go* words and the kinds of wind direction represented by them. Roughly speaking, three kinds of patterns are observed.